

トウキの苗を
植え付ける生
産者たち＝岐
阜市東板谷

“製薬業発祥の地”産地化へ一歩

岐阜市

薬用作物の産地化を目指す岐阜市は27日、市内の休耕田でキキョウやトウキ、ハトムギといった薬効を持つ作物の栽培を始めた。初日は有志の農家ら9人が、種まきや苗の植え付けに取り組んだ。
(古家政徳)

薬用作物栽培始まる



トウキやハトムギ 農家有志、7品种植える

市は、美濃の国で薬を作っていたとの日本書紀の記述を基に「製薬業発祥の地」として産地化を計画。農家や団体で1月に市薬用作物栽培協議会を立ち上げ、本年度は同市東板谷と同市上西郷の休耕田計約35㌥で9品種を育てる。種苗は独立行政法人医薬基盤研究所から提供を受け、栽培では東京生薬協会から指導員が派遣される。

この日は同市東板谷の休耕田で7品種の種苗を植えた。指導員2人が品種ごとに植え付け方などを説明し、生産者は一つ一つ覚えるように作業を進めた。薬用作物は収穫まで複数年かかる品種がほとんどで、本年度収穫できるのはハトムギのみ。製薬会社に出荷するには数十単位での収量が必要となることもあり、市では5年間を目安に栽培技術の習得、風土に適した品種の種苗の増産、新たな生産者の掘り起こしを進めていく。

参加した、まめな農園（同市北島）の木村仁士さん（37）は、無農薬野菜を手掛けており、同じ体が良いものを作っていきたいと参加した。特産にして市の活性化につなげたい」と意気込んでいた。